

8月8日、9日に、東京都での、東大見学会 企業・大学訪問に参加した。この2日間は、今まで体験したことのないことばかりで、とても貴重な体験となり、本当に充実した時間を過ごすことができた。大きく4つの企画があり、どれも興味深いものだった。特に印象に残った企画は次の2つだ。

1. ディレクトフォース

東京研修 1 日目。最初の企画は、ディレクトフォース・笹川平和財団共催夏季プログラムだった。最初は、近藤玄太さんによる基調講演だった。「ものがたり」としてのものづくり～気軽な選択肢となる義手の開発～と題した講演をしてくださった。近藤さんは、小さい頃、左利きという障害をもっているために、はさみや改札などの使いにくさに疑問を抱いていたそうだ。私も左利きだが、ほとんどそのような疑問を抱いたことがなく、はさみは気づいたときには右で使っていた。左利き用の物も持っていたが、右で使うことに適応していた。疑問を抱くとしたら、おたまの注ぎ口が右側についていることくらいで、それも左で使いながらおかしいなと思うぐらいだ。なので、私はもっと、身近ないろいろなことに疑問を感じ、それを大事にした方がいいのかなと思った。近藤さんは、もともとやりたいことがなく、何となく東京大学工学部に入学したそうだ。しかし、そこで義手の研究をしていた教授に出会ったことが義手の研究を始めるきっかけになった。講演のなかで近藤さんは、「ものづくりは映画制作、ものづくりは世界共通言語、多彩な主題、主人公による劇中劇」とおっしゃっていた。昔の義手は 150 万ほどかかり、腕、手がないという障がい隠すためのものだった。しかし、今では 3D プリンタが普及し、それを使うことで、コストが 4 万ほどになり、安く、かっこよく、色や機能などのデザインを重視した義手を研究、制作し、使われている。時計や靴などを自分の好みに合わせて使うように、義手も好みに合わせ、個性として、手による“表現”ができるように、義手を使う方と交流しながら、研究を進めているそうだ。

ディレクトフォースは、3人のお話を伺った。みんな社長や会長、研究員といったすごい人達で、とても緊張した。

最初は、矢ヶ崎隆二郎さんだった。矢ヶ崎さんは、海外生活を約 20 年されたことがあり、それについてたくさん聞くことができた。まず、日本で大学を卒業した後、2年間アメリカの MBA で死ぬほど勉強したことが、乗り越えたという自信になったそうだ。ホームステイや留学も経験したそうで、それらの国際交流によって今もとても生きること、良かったことはと問うと、同志ができたことと答えてくださった。高校の仲間に見た存在が海外にもいて、世界中に今でも会う友人がいるというので、憧れた。世界で仕事をするため、もちろん日本とは宗教、文化の違いもあるが、アジアなど、戦争の記憶があ

る人がいる所へ行くときは、それを理解してから行かないといけないそうだ。私は、海外で仕事をするという聞いて、大変なのは文化の違いぐらいだろうと思っていただけ、考えが甘かったと感じた。

次は、青木先生だった。青木先生は、2社の社長の経験があり、私はなぜ2社も社長ができたのだろうと疑問に思った。青木先生からは、事前に質問の回答を頂き、ヘッドハンティングの会社に登録すると、ヘッドハンターから優秀な人材に声が掛かり、それによって、2度社長を経験したと答えてくださった。事前に回答を頂いたためか、私はうまく話を広げられなかったが、青木先生が今までの経験から、様々なことを話してくださった。その中で、印象に残ったのは、学生時代とは、社会という大海原へ出航する、航海前の準備期間である・五感で感じる体験をすることで現実を受け入れる・常にWhy、自問自答でHowを探し、自分の意見をもつ、ということだった。

最後は、樋口恵佳さんだった。樋口さんは、若い女性の方で、国際法を研究し、海洋生物多様性保全についてギリギリの妥協点を提案しているそうだ。最初は、弁護士を目指し法学部に入ったのだが、国際法の弁論大会で優勝して国際法を学び、問題を今ある法律を使って批判する側にいきいと思ひ、研究者になったそうだ。私は、法学といたら男性が多いイメージだったため、働きづらいのではないかと疑問に思った。実際、男女比は7:3程で男性が多いのだが、今まで働きやすそうな所を選んでいたのであるかもしれないが、働きにくいと感じたことはないそうだ。それは予想外だったため驚いたが、女性でも働きやすい環境なのはいいなと思った。

2. 企業・大学訪問

午後は、3人のグループで、一橋大学の青木孝之教授を訪問した。私たちは、法学に興味があり、一橋大学への進学も視野に入れているため、青木教授を訪問することにした。青木教授は、裁判官の経験を持ち、今は、一橋大学の教授として刑事訴訟法を研究され、東京弁護士会にも登録されている。私たちは、先生が提供してくださった資料を参考に、新幹線でさらに理解を深め、質問内容を広げることができたため、より質の高い訪問になった。

最初は、裁判官だった時のことを尋ねた。裁判官は公正中立が最も大切なことのため、日常生活でも気をつけなければならないことがいくつかある。例えば裁判官でも飲みに行くことはあるが、その時には、閉鎖的で安心な所しか行かないそうだ。また、裁判官は通勤族で、どこに住むことになるかわからないので、旅行先でもふらっとお店に入ったりしないそうだ。裁判官は、こういったことをして、公正らしさ論を大切にするのだそうだ。裁判官は、和解がない限り、必ず勝ち負けを決めなければならない。いくら公正中立だと言っても、人間であるから、判決する時にかわいそうだと思うこともあるのだそうだ。しかし、どんなに情が移っても、犯罪は犯罪。その犯罪ごとの量刑は決まっているため、法

律の範囲以内で量刑を決めなければならない。どんなに一生懸命やっても、どちらかからは恨まれる。勝った方から感謝されたことはあるが、負けた方からは一度も、ありがとうございました！と言われたことはないそうだ。このようなお話を聞いていると、裁判官の仕事は辛そうだなと感じる。しかし、判決を言い渡せる唯一の立場として、責任をもって仕事をしなければならないのだと思った。教授は、裁判官の仕事が大好きで一生やるつもりであったが、のんびりする暇もなく、町工場育ちのため窮屈に感じたそうだ。そして、法科大学院を出て大学の先生になれるようになったため、未練はあったが、今の仕事に就いたそうだ。教授は、「自分が今までやってこられたのは、資格を持っていたから」とおっしゃっていた。私は、裁判官も弁護士も司法試験に合格したからできたのであり、思い切って教授に転身できたのも法曹資格を持っていたためであるので、資格を持っているだけでこんなにも選択肢が広がることに驚いた。そして一橋大学については、アットホームな大学だとおっしゃっていた。先生との距離が近く、卒論のテーマを決めて少人数で話し合うゼミは有名だ。そして、最後に教授が、私たちが今できることについて話してくださった。それは、将来の姿を具体的に思い描くということだ。私は、将来の自分の姿を思い描くことができない。法学部に興味があるので、法学部に入ったとして、その後の姿をこれからの数年でたくさん思い描いていきたいと思う。

この2日間は本当に濃く、楽しかった以上に学ぶことだらけだった。ディレクトフォーエスや大学訪問は、普段の生活では絶対に会えないような方々と出会い、貴重なお話を聞き、私たちの疑問にも丁寧に答えてくださった。本当にすごいことだったと感じ、大きな経験値を得たと思う。また、OD・OGとの座談会や、東大見学会で実際に東大生と交流したことで、勉強のことや大学生活、またその先のことまで、いろいろなお話を聞きくことができ、大学への関心が高まった。そして、努力すればどうにでもなるんだと感じた。特別な能力を持っていなくても、努力次第で、一橋大学や東京大学に入れてしまうんだと、大学の存在が少し身近に感じた。受験まであと2年以上ある。もうすでにだめだと思っていたが、地道にやれば大丈夫なんだと再認識できた。本当に実りある時を過ごすことができ、良かった。この特別な体験を忘れず、これからの学校生活、将来に繋げられるよう、頑張りたい。